

## 310

Seating systemが及ぼす日常生活への影響  
～pusher症候群に対して～

松本多正

霧島杉安病院リハビリテーション科

Key words: Seating system, 日常生活, (pusher症候群)

【はじめに】Pusher症候群を呈した片麻痺患者のADLの予後は必ずしも良いとは言えず、生活障害を引き起こす重大な因子の1つと言える。今回、Pusher症候群を呈した維持期の3症例に対しSeating systemを導入した結果、車椅子駆動を中心に変化が見られたので報告する。

【症例紹介】維持期の脳梗塞患者3名。制度利用にて普通型車椅子を作成していた。円背著明で麻痺側の随意性は低く、Pusher症候群が著明であった。車椅子座位では非麻痺側上肢にてアームレストを押し付けるため上肢操作が困難であり、姿勢が崩れ車椅子駆動が困難または過剰努力を有していた。

【方法】普通型車椅子へのSeatingを行った。今回は市販のバスマットとウレタン、ベニア板を用いて行ったため1人1000～2000円と安価に作成することが出来た。

1. 座面：Engstromが提唱するErgonomic Seatingの考えに基づいて行った。床と座面を平行に保つためスリングシートの上にベニア板を置き、坐骨が前方に滑らないようにシートの前方向から坐骨までバスマットを位置させた。その上に症例の臀部に合わせ加工したウレタンを置いた。
2. バックレスト：バスマットとウレタンで作成し、麻痺側のみ前方に延長し外側からベニアにて固定することで麻痺側からの感覚入力を得られやすい状態を作った。この時、両肩甲骨の可動性を制限せぬ様配慮した。
3. 麻痺側のアームレスト：支持面を広くし上肢の重みにより体幹が過度に前傾せぬよう注意した。

なお、Seatingを行った他は特別な介入は行わず約2週間の経過を追った。

【結果】車椅子座位、端座位ともにPusher症候群は軽減され車椅子駆動での姿勢の崩れは減少した。そして、非麻痺側上肢の自由度は向上し、駆動における過剰努力が軽減された。ADLへの般化として、食事時の食べこぼし減少やトランスファー時の介助量軽減が見られた。

【考察】Pusher症候群に対するアプローチで触一運動感覚入力の重要性を謳った文献は多い。しかし、それらの視点で徒手的にアプローチしても時間的な制約を受けることが多い。そこで今回は日常生活の中でどう関わられるかという視点からSeatingに着目した。車椅子上で麻痺側へ押し付けが見られる際、麻痺側には感覚が入力される手がかりは少ない。そこで固めの素材で押し付けに耐えうる壁を作り感覚のフィードバックを期待した。また、座面を人間工学的に加工したことで骨盤がニュートラルな位置で安定できたことも身体両側に均等な感覚入力を行うために重要だと考えられる。今後、姿勢の変化に合わせたSeating systemの再考や使用素材の検討を行っていく必要があると考える。

## 24日 D会場

## 311

## ギランバレー症候群による四肢麻痺患者に対してのノートパソコン本体マウス用自助具の工夫

泉 良太<sup>1)</sup>、小河内寛子<sup>1)</sup>、山内克哉<sup>1)</sup>、美津島 隆<sup>1)</sup>、林 満<sup>2)</sup>、能登真一<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>浜松医科大学医学部附属病院リハビリテーション部、<sup>2)</sup>株式会社松本義肢製作所、<sup>3)</sup>新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科

Key words: 自助具, コンピューター, ギランバレー症候群

【はじめに】デスクトップ用またはノートパソコン用別売りマウスの自助具は多々あるが、ノートパソコン本体マウス用の自助具は販売されていない。今回、我々はノートパソコン本体マウス用自助具を作製したので報告する。【症例】67歳男性右利き[診断名]ギランバレー症候群(軸索型)[障害名]四肢麻痺[現病歴]1989年冬にギランバレー症候群発症し、ステロイド治療で軽快した。2003年1月7日、朝に四肢の脱力をきたし、救急車で来院した。ギランバレー症候群再発で内科入院となり、人工呼吸器管理となった。1月9日、リハビリ部受診し、PTでbed sideでの拘縮予防のためのROM訓練を開始した。2月18日、OT訓練で、bed side ROM・筋力強化訓練を開始した。2004年5月24日、ポータブルスプリングバランサー(以下PSB)を購入した。<現症(平成16年7月8日)>[精神機能]清明[言語機能]気切のため不可[脳神経]両側顔面神経麻痺、嚥下不良[MMT(右/左)]僧帽筋4/4、三角筋2/2-、上腕二頭筋3/2、上腕三頭筋3+/3、橈側手根屈筋・尺側手根屈筋1/1、長・短橈側手根伸筋・尺側手根伸筋1/1、総指伸筋2/2、浅指屈筋2/2、深指屈筋2/2、手内在筋0/0、下肢2-/2-[深部腱反射]両側減弱[病的反射]両側陰性[感覚]両側鈍麻[起居動作]全介助[ADL]食事(右PSB、右手関節背屈装具(以下装具)、長柄スプーン使用で20口程度可)、移動は電動車椅子で可、その他全介助[APDL]以前は趣味がパソコン【方法】ノートパソコン(NEC製 LaVie)を使用し、文章ソフトはMicrosoft Wordとした。装具、PSB使用で、装具掌側に自助具を取り付けた。【ノートパソコン本体マウス特徴】1. 接触面積が約20 mm<sup>2</sup>以上必要、2. 静電気の発生が必要【自助具特徴】1. 大きさが横6.5cm×縦14cmとコンパクトであり、重量が17gで軽量である。2. スティックはヒートガンで、自由に曲げることができる。3. 手指筋力が弱くても使用できる。4. 伝導ゴム幅を1.5cmとし、接触面積を広くした。5. 先端に伝導ゴム、スティック内にアース用コード、装具にカシメを使用することと、不織布と伝導ゴム間で摩擦を起こすことにより静電気を発生させることができる。【結果】右でのマウス使用、パソコンキータイピングが可能となった。タイピング速度は、初期では1文に2～3分費やしたが、現在は1文を30秒程度で可能となった。コミュニケーションが容易となり、趣味であるパソコンの使用も可能となった。【まとめ】作製の際に難渋した点は、マウス内の伝導ゴムの接触面積が約20 mm<sup>2</sup>以上必要なことと、静電気を発生させる必要があることであった。接触面積については伝導ゴムの幅を広くすることによって対処し、また静電気は、装具にカシメを打ち込み、身体と接地させ、先端のゴムに不織布をまくことによって発生させた。その結果ノートパソコンマウスによる操作がさらに容易になり、コミュニケーションや趣味の再獲得に寄与し、QOLの向上にも貢献した。